校長室だより～燦燦～ №９５９

芭蕉

2024.1.30

松尾芭蕉、誰もが知っている江戸時代の俳人である。中学校の国語の教科書には、有名な『奥の細道』の冒頭と平泉の部分が載っている。松尾芭蕉に親近感をもつのは、やはり、芭蕉が福島県を訪れているからだろうか。

松尾芭蕉が生涯をかけて詠んだ句は、およそ９８０句に上る。芭蕉といえば、誰もが知る有名な句の一つに、「古池や　蛙飛びこむ　水の音」がある。この句の表面的な意味はわかる。だが、本当の意味はわからないままでいた。

芭蕉が３７歳のとき、芭蕉庵の川向こうにある臨川庵（りんせんあん）で、名僧の誉れ高い根本寺２１世住職仏頂（ふっちょう）和尚に参禅している。和尚から「人生とは何か」と尋ねられたときの芭蕉の答えが、まさに「蛙飛びこむ水の音」だった。宇宙の悠久なる働きからしたら、人生はポチャンという音のような瞬間だというのである。すごい答えである。

この答えを聞いた和尚は、「よし、そのポチャンという短い人生を自分らしく生きよ」と言って、芭蕉に法名を与えた。それが「芭蕉」という号である。バショウという多年草は、風が吹けばあっという間に、すぐ破れてしまう植物である。人生は一瞬と悟った芭蕉。その芭蕉に対して、すぐにちぎれてしまう芭蕉という号を即座に与えた仏頂和尚。その呼吸は、実に見事であり、粋でもある。

なぜ芭蕉なのかと思っていた。バショウは今でいうバナナのような木で、芭蕉庵にあったという程度の認識だった。「古池や蛙飛びこむ水の音」は、何かを意味している雰囲気が漂った句である。それが、人を惹き付けるのかもしれない。あるいは、その命のリズムが、人の心に伝わり、生命を躍動させるのかもしれない。

福島県や山形県を訪れると、芭蕉の句に出合うことがある。石碑に刻まれていることが多い。福島市では、文知摺観音で、「早苗とる　手もとや昔　しのぶ摺」、医王寺では、「笈も太刀も　五月にかざれ　紙幟」の句を残している。そして、飯坂温泉に弟子の曾良とともに泊まっている。

山形県に行くと、有名なのは、「閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声」だろう。一般的には山寺と呼ばれている立石寺の麓にある宿坊で詠まれたものである。最上川が流れる大石田では、「五月雨を　あつめて早し　最上川」を詠んでいる。また、岩手県まで足を延ばすと、平泉で、教科書にも載っている「五月雨の　降り残してや　光堂」「夏草や　兵どもが　夢の跡」を残している。

このような知識をもっていると、その場所を訪れたときに、芭蕉の気持ちに思いをはせたり、江戸の世を思い描いたりと、想像が膨らむ。人生が豊かになるということかもしれない。芭蕉の句に通底する、ある種のもの悲しさのようなものは、ポチャンやバショウからきているのかもしれない。飯坂温泉の鯖湖湯では、相変わらず熱いお湯に浸りながら、芭蕉と曾良も入ったのだろうかとふと考えたりする。そんなことが楽しい。